

令和 3 年度

習志野市男女共同参画週間事業講演会

より良い未来の分岐点

～今日の生きづらさを明日の生きやすさに～

報告書

令和 3 年 7 月 4 日(日)

午前 10 時～正午

サンロード津田沼 6 階 大会議室

オンライン(Zoom)同時開催



主催：習志野市男女共同参画週間事業運営委員会・習志野市

■概要

テ ー マ : 「より良い未来の分岐点～今日の生きづらさを明日の生きやすさに～」

開 催 日 時 : 令和3年7月4日(日) 午前10時から正午

開 催 場 所 : サンロード津田沼 6階大会議室

主 催 : 習志野市男女共同参画週間事業運営委員会・習志野市

受 講 者 : 会場 16 名／オンライン 16 名／動画による視聴回数 182 回(申込者数 68 名)

■構成

司 会 松永 照義

習志野市男女共同参画週間事業運営委員会 副委員長

10:00～10:10 開会挨拶

土肥 洋子

習志野市男女共同参画週間事業運営委員会 委員長

片岡 利江

習志野市協働経済部 部長

10:10～11:40 講演会

「より良い未来の分岐点～今日の生きづらさを明日の生きやすさに～」

講師 湯浅 誠 さん

社会活動家・東京大学先端科学技術研究センター特任教授

11:40～11:50 質疑応答

11:50～12:00 閉会

■協力

市内の図書館には、今回講演をいただいた湯浅誠さんの関連書籍が20冊ほどあります。今年度は講演会とのコラボで、習志野市立中央図書館で湯浅誠さんの書籍展示を実施いたしました。



■講演内容

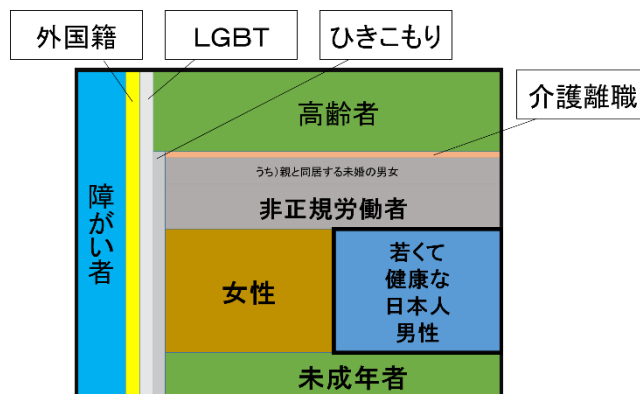
コロナと居場所 ～こども食堂の取組みから～



日曜日の午前中、雨の中を集まっていたありがとうございます。オンラインで視聴の皆様もおはようございます。こども食堂が維持できるように、昨年から補助金を出しています。「今日をしのぐ、明日を拓く」今日の今日は、しのがないといけない。今日をしのぎつつ、明日を拓けるよう種をまいています。地域の飲食店からお弁当を購入して、必要な人に届けているこども食堂もあります。地域の中でお金が回り、地域循環になります。

男女共同参画にフォーカスしながら話していきます。考えのベースとなる人口構成のところから始めていきたいと思います。

0歳～113歳まで、私も皆さんもどこかにいます。上の28%分は高齢者、あと10～20年で37%までいきます。下の15%分は未成年人口で、毎年減っていきます。今どんどん出生数が減って、100万人切ったなと思ったら、90万人を切った。ここまでは、よくよく皆さんご承知の通りです。年齢問わず国民の5～10%（500～600万人）は障がい者人口です。フランス・ドイツは10%、北欧は15%です。なんで日本は、そんなに少ないのでしょうか。障害者手帳の取



りやすさによって、割合は簡単に変えられます。日本は公式的には5%、手帳は取得していないけど障がいをもつ人が10%くらいいます。2%の264万人はコロナ前の外国籍の人数です。LGBT の当事者は6.5%。65歳までの110万人は、ひきこもり人口で、そのうち40歳以上が65万人です。

50歳代～60歳代の10万人ずつが、毎年介護離職をしています。仕事と介護の両立ができなくて職場を離脱する人の7割が女性、3割が男性です。東レ WLB 研究所の渥美さんの研究によると、介護で辞めていく人は会社で頼られている人が多いそうです。介護の特徴のひとつは、先が見えない終わりがわからないことです。本人の貯金は限られており、何年かかるかわからないでお金を使っていくことになります。計画性が必要です。兄弟・親戚・ケアマネ・ヘルパー・医者・看護師、多くの関係者の中で調整能力のある人がキーパーソンになり、抜き差しならなくなり、抜けられなくなります。こうした計画性・資金計画・調整能力が高い人は、50歳代の頼れる部長などであり、その人のおかげで会社が回っているため、社会的損失が大きい。

2014年に安倍元総理が新三本の矢構想を掲げ、二本目の矢は介護離職ゼロでしたが、今でも解消していない深刻な課題です。時々テーマは大事、忘れてはいけない。民衆の武器は記憶だと言った人がいる。35歳～44歳の300万人は、親と同居の未婚の男女です。就職氷河期世代で、一昔前だと高校生位のこどもがいる世代です。この人達が出たため、第3次ベビーブームは起こりませんでした。ベビーブーム、団塊ジュニアと、人口学者はもう一度波が来ると思っていたが、そうはならなかった。社会的要因を甘くみていた。

残ったうちの半分は女性と、若くて健康な日本人男性。一昔までの家族は、この人たちが支えていた。

気がつけば、圧倒的な少数派。この人たちが支えて、他の人が支えられていた。世の中が回らなくなり、発想を変えて皆で支え合う地域づくり、働き方改革が必要になった。以前は、若くて健康な日本人男性がスタンダードで、皆そこに合わせていた。若くない人は、若いふりをしていた。健康でない人は、病気を隠して働いていた。日本人じゃない人は、日本名で働いていた。女性は、男性以上にやらないと認められなくて、無理に合わせようとしていた。若くて健康な日本人男性でない人は、しんどかった。妊娠をして、つわりや足がつる、食べることが気持ち悪いなどの女性は、若くて健康な男性のふりができないので謝っていた。ガンが発覚すると、ご迷惑をおかけすることになり謝っていた。そして周りは暗黙のうちにそれを求めている。ガンになった、妊娠した、なんで謝らなくてはならないのか、満員電車に乗れない人もいる、いい人に来て欲しいと思ったら、その人の家庭の事情をふまえた提案ができないと、いい人は辞めてしまう。働き方改革は、残業代なくそう運動ではない。この数年、だいぶ変わってきた。

この12年位の間、総理が6、7人代わっている。にもかかわらず、言っていることはずっと一緒。家庭の事情、働き方、女性の問題は男性の問題、男性の育児・家事参加が増えないと難しい。なかなか変わらない中で、洗剤や掃除機のCMなどに若い男性を起用したり、在宅テレワークなどコロナが後押しした面もある。現在私はほぼ100%家にいて、私の家事比率は相当変わった。妻は、精神障がい者のグループホーム勤務で夜8時ごろ帰宅する。満員電車が辛かったが顔のできものがなくなった、オンラインで勉強する意欲が高まって不登校の子が元気になったなど、結構いい話も聞く。コロナが過ぎ去っても、後戻りしないでのばしていきたい。

コロナ禍で、全国のこども食堂が頑張った。会議も全国の在住者とオンラインでできる。後戻りさせない。コロナが終わっても、この状況は変わらない。コロナが過ぎ去っても、課題がなくなるわけではない。日本は、コロナ前から課題先進国だった。そのまま引き受けていけないといけない。

こども食堂ってどんなところなのか。80歳代、90歳代の中山間地に住むひとり暮らしのお年寄りを食事が終わったら町中で買い物をして送り届ける。高齢者の買い物支援を、こども食堂とかけあわせている。厚生労働省が発表した調査によると、参加者に「こどもだけ」「生活保護世帯だけ」などの条件をつけているこども食堂は全体の2割。8割は誰が来ても良い場所になっていて、6割以上には、高齢者が参加している。地域の交流の場所が減り、こういう場所がこの8年で約5,000か所に増えた。知床から石垣島までわーっと広がった。昔のこども会の感じ。こどもがワイワイ、親がいて高齢者も参加するのがどんどん増えている。浄土真宗の西・東の本山でこども食堂をやっている。お寺って地域の交流拠点。自治会がやるこども食堂も増えている。今の自治会の悩みは、高齢化と人材不足、少ない人で役職を回している。こども食堂はお金も出ないが、担い手がどんどん増え、若い人が集まってくる。宮崎市では、こども食堂が自治会の加入率アップにつながっている。高齢化、こども減少で日本社会がどんどん淋しくなっている。

2010年にNHKが無縁社会を報じ、無縁死32,000人の衝撃を放映した。地域が淋しく、人と人との関係が希薄になり、広い屋敷に一人住まいが増えた。お隣は空き家、商店街はシャッター通り、学校の閉校もめずらしくない。縁も薄くなってきた。日本社会はコロナの前から、人と人の距離が離れかけていた。密の反対の疎に向かっていた。家の中、地域全体が疎。疎に向かう地域に密をつくろうとこども食堂がやってきた。全体としてスカスカになっていくのは淋しすぎる。過疎化は、コロナが終わってもいきなり地域社会は賑やかにならない。

つながりって大事。人と人の距離をとらないといけないからこそ、つながりは大事。気になるのは、うちの母ちゃん(今年80歳、要介護)地域で誰かつながっているのか。五万という人が、

うちの親は、誰かとつながっているのかと思っている。

「当たり前はありがたい」という感覚。死に目にも会えないかも。あたりまえに行けていたのは、ありがたい。学校が休校すると、あたりまえってありがたいと骨身にしみる。平時のありがたみを痛感するのは非常時。健康になったら、健康のありがたみを忘れる。大事なことは、生活習慣、地域社会のありようそのものを見直す。ここで学んだことを忘れない。あたりまえってありがたい、これからの地域社会を拓く。こうした居場所も大事、今後にむけて弾みをつける。振り返ってみれば、この10年間はそういう10年だった。東日本大震災に始まり、コロナで終わった。50年に一度の豪雨が毎年どこかで起こっている。昔は長い日常に非日常があった。今は、非日常の中に日常がある。「災間」の思想、私たちの日常は、災害と災害の間にある。コロナはいつか終わる。次に何がくるかわからないが、遠からず何かある。

2010年代に一貫して増えたのが、こども食堂。疎に向かう中で、なんとか密をつくろう。その人達が今、困難を生きている。他人事に考えずに、新しいつながりをくみ取って、拾い上げていかないと、コロナにやられっぱなしで終わる。こうした居場所の担い手は、ほとんどの場合女性。皆でご飯作ってみんなで食べる。なんで自治会はみんな逃げ回っているのに、こども食堂には人が集まっているのか。担い手は多様化している。子育てが始まった30歳代の地域デビュー、仲間に声かけて皆で見合う、共同保育の代わりにこども食堂がある。子育てが終わった60歳代は、地域の中で課題を抱えたこどもたちに、これならできるとこども食堂に加わっている。この人たちは、地域のコミュニティや自治会では、多くの場合すみっこにいる人達。自治会長に占める女性の割合は6%、国会議員11%、大企業役員8~9%。東北に行くと3~4%。今でもテーブルにつくのは、全員男性。発言権も全員男性。女性は、正式な寄居中、一言もしゃべらない。この人たちが中心に座るのが、こども食堂。誰もはしっこに置きたくない。誰とも交わらなくてもいい、どこがはしっこかわからない。女性が中心にあることと、無関係ではない。自治会は、やり手がないが、こども食堂はどんどん増える。役職は形骸化し、役割はみんなが担い手として息づく「我がこと感」がある。役職に人をあてはめるのではなく、皆に役割がある。女性が作っているこども食堂が、平時に広がっていったら、孤独孤立ともうちょっと離れられる。10年間の教訓、コロナの教訓を忘れてはいけない。

最後に89歳の時に、自宅開放型のこども食堂にされた方のお話です。一人暮らしで、365日、一人でご飯を食べていた。ダイニングを中高生の居場所にして、月1回ひ孫位の子と一緒に食事する。地域の人に来て、食事を作る。90歳の誕生日は、病院(豊島区)でにぎやかな入院生活。こどもたちが寄せ書きをして、91歳のご臨終の際は、こども食堂のみんなが笑顔で見送っている。こどもたちのためと思って、こどもたちのつながりの場を作った。自分が笑顔で見送られる。支え合い、つながり続ける。核家族化、おひとりさま、つながりを作るのが居場所の役割。コロナの後も、私たち社会の課題。いざつながれる、集まれるとなったら、形

にしていく。地域の女性たちの役割は、はしっこをつくらない。

■質疑応答

Q: こども食堂の運営に憧れています。外国人、ひきこりの方は、こども食堂にきますか？

A: 外国籍のこどもが来ているところが沢山あります。国際交流センターがこども食堂をやっている。

Q ヤフーの記事でコラムを読んで、先生の活動に感謝の気持ちしかありません。自分でもできることがないかなと思い、是非この機会に気持ちのある人と繋がりたいです。

A: この指とまれ的なことを言ってくれる人は有難い。全部の小学校区にあったらいい。こどもは、自分の小学校区を越えるのは大変です。多世代交流の場所が大事。やりたい人は、きつと沢山いる。やっているところを見に行くのがいい。牛乳とバナナだけ、味噌汁とごはん、いろんなところがある。

Q: 若くて健康な日本人男性に皆が合わせているのはわかります。こども食堂が続くために、硬直化しないで役割重視でいけるには？

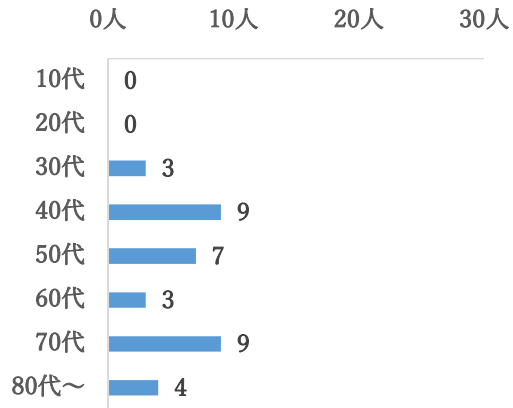
A: いろいろな人が参加してくれるダイナミズムを大事にし、維持することを大事にする。私のところに企業からの問い合わせがない日はない。大企業、中小企業問わず、ほぼ毎日一年位続いている。地域の居場所は民間ベースでやるのがよい。行政がやると、自発性と多様性は失われる。いい意味での素人感を手放さない。誰が参加者で誰が運営者かわからない。受益者でなく皆が運営者。こども食堂が持っている素人感が大事。変にプロフェッショナルにしない。こども食堂を、第2の学童にしてはいけない。自発性と多様性は失われる。今の今は素人さを大事にしながら、民間ベースでやる。結果として「こういう多世代交流の場ならお金を出す」という行政サービスを引き寄せていくことが大事。

文責: 令和3年度 習志野市男女共同参画週間事業 運営委員

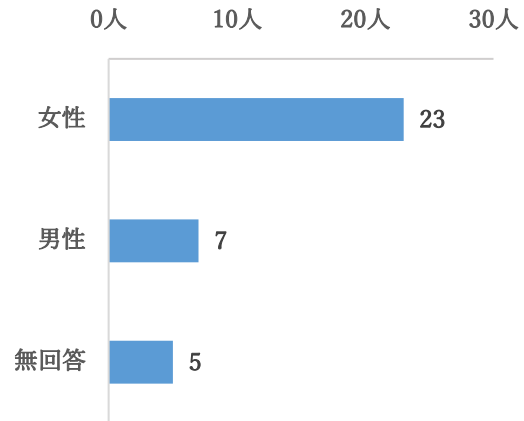


参加者アンケート（運営委員の回答を含む）

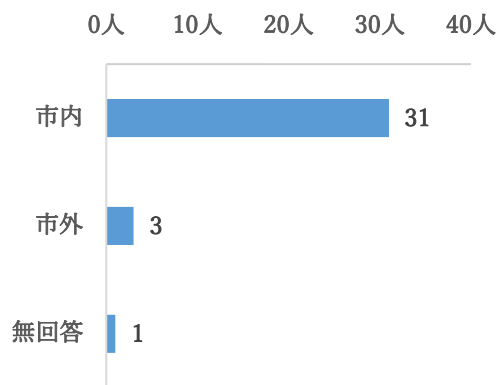
1. 年齢



2. 性別



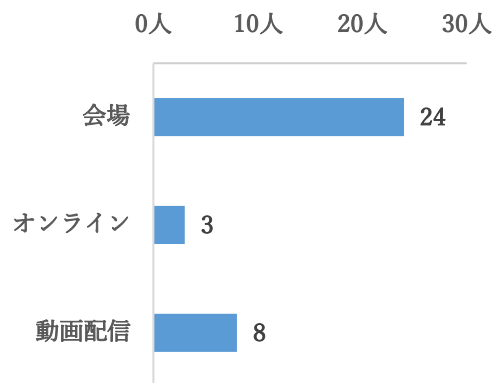
3. お住まい



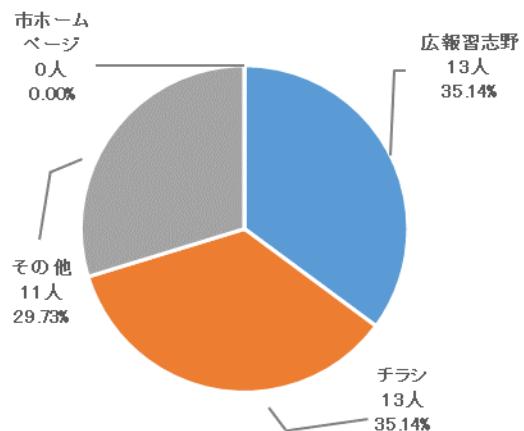
4. 職業



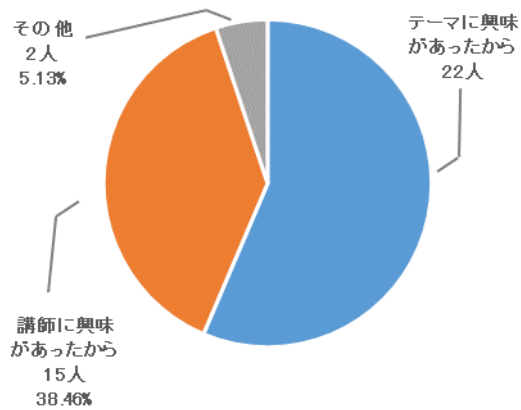
5. 参加方法



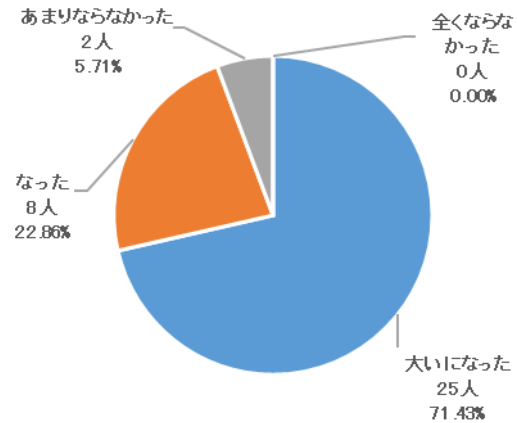
6. この講演会を何でお知りになりましたか



7. この講演会に参加した理由は
何ですか(複数回答)



8. 講演会の内容は参考になりましたか



- つながりやこども食堂、日本の人口比率などすべてのお話が面白く興味を持った。資料も豊富で自宅に帰ってから読みたかった。
- 生きづらさは、つながりを作り深めていくこと、手をつなぐことで軽減されると実感。地域での活動ができればと思う。
- 常に日々感じていることをお話しされていてとても共感しました。
- 始めてお聞きした内容だったのでとても楽しかった。
- 自分達も似たような活動をしてるので。
- 「つながり」「災間」を考え、これからを良い未来にしていきたい。
- 冒頭の人口構成を使った説明は、とても分かり易く、とてもなるほどと思えることがたくさんありました。
- 湯浅先生の話は参考になりました。ありがとうございます。質疑応答の時の進行の方のマイク回しがもう少しはっきりしていると良いと思いました。(zoom で見ている人には突然質問が始まると思ったのでは)
- 地域での人と人のつながりの大切さ、セーフティーネットの構築の必要性を痛感させられたお話の内容でした。
- 非常時における①つながりと②あたりまえを大事にすること。をコロナが終わっても、学んだことも忘れないことが重要だと気づきました。
- コロナに負けず拡がっていることを知った。湯浅さんに都知事選に出てほしい、今、政治家と我々の考えとへだたりがありすぎる。総理は選べないが都知事は選べるので
- 人口構成の変化という根っこの話に沿って、発想をかえるということで、色々なことを根本から理解できました。

- 人口構成など社会背景が現状の課題や施策に影響していることがよく理解できた。最後の高齢女性の話良かったです。
- 大きな視点からの講義で納得する事が多かった。事例の出し方も面白かった。今日のテーマにぴったりだったと思った。こども食堂と男女共同参画を結びつけたのはさすがだと思った。
- 働き方改革の整理ができ意味が良くわかった。こども食堂が「つながり」を培養する意味が良くわかった。
- 地域や人間関係の希薄さを再認識するきっかけになった。
- 高齢者に関わる仕事をしており、現在私自身も子育て中であり、みなが役割を持てる場所である、こども食堂のあり方、そこにいたるまでの考え方が大変参考になりました。ありがとうございました。
- とても参考になりましたし、充実したお話を聞く機会に感謝いたします。今後も本を拝読し、思考を深め、地域で活動を考えていきます。
- ビッグデータから日本の現状把握とそれに立脚した具体的な施策、生きやすい共生社会の提示が判りやすく参考になりました。
- こども食堂や日本を取り巻く現状と課題を知ることができたため。
- お話の内容が興味深く、楽しく拝聴できました。
- こども食堂に対しての認識不足でした。こどもがいれば高齢者もいる・・・どなたが参加しても良い。地域の居場所作りに関心を持ちました。
- 生きづらさ、というテーマ内容が、長時間の講話の中で印象に残らなかった。女性の働き方に、良い取組みの提案がなされていたのかよくわからなかった。居場所を提供する、というのは良い活動だと思うが、悩みを抱える本人がどのように考え方の変化や生活の工夫ができるかについては、具体的なよい提案がなされているとは感じられなかった。属性の統計の説明に時間を割いていたが、属性型にはめられない方へ論点がなかなか移らず、話し方に引き込まれなかった。的確な視点を持たれている講演者だと思うが、今活動されている事業へ関心がない者には参考薄
- 37%にも上る超高齢化する人口構成、働く若者の過重労働、様々な生きづらさにある人々を分かたず関りを持ち相互に理解し合える機会を持つことが必要と分った。”明日の生きやすさ”へつなぐ作業の一步はコロナ下でも隔てなくつながる機会を WEB でも持てればと思う。今後へ、具体的な課題をも解決する道筋を作れると期待が膨らむ。
- 子ども食堂が、コミュニティーの場となることは、あくまでもは派生効果で、子ども食堂が制度として確立していない段階で、様々な効果を鼓舞することには慎重であるべきではないかと感じた。
- いまの社会の状況や課題、未来をひらくために何ができるか、湯浅 誠さんのお話から多くの考えるきっかけをもらうことができた。

反省点・改善点等(抜粋)

◆質疑応答の場面

- ・質疑応答の時間がもう少し長ければ、色々な意見が出たかも知れない。最後に挙手された男性もあり、質疑応答の時間を延ばせると参加者の皆様には満足して頂けたのかと思った。
- ・今回の講演会は、男女共同参画の市民団体経由の誘いで参加した人と、こども食堂に関心があり参加した人がおり、それぞれ周知に関する情報源が違う。こども食堂に関心がある人達がどこでこの講演会を知ったのか分析し、既存のルートではない参加者への質問を、今後設けたほうがいいのではないかな。

◆その他

- ・今回は残念ながら大勢の方々を迎えることができなかったが、時代の流れに遅れないよう、運営委員会で意見を出し合わなければと思った。次回はニューノーマルの暮らしに寄り添う男女の実生活について話し合ったらと思う。
- ・こども食堂と関係していない参加者は今回の講演会をどう感じたのか知りたい。入場人数が制限され、Zoom もできない人もいたという声を聞いた。Zoom の見方について案内があるといい。

「男女共同参画週間」とは

令和3年度 男女共同参画週間ポスター

国は、男女が互いにその人権を尊重しつつ、喜びも責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を発揮することができる男女共同参画社会を実現するため、平成11年6月23日に「男女共同参画社会基本法」の公布・施行しました。

それを踏まえ、毎年6月23日から29日までの1週間を「男女共同参画週間」として、さまざまな取組を通じ、男女共同参画社会基本法の目的や基本理念について理解を深めることを目指しています。



＜令和3年度 習志野市男女共同参画週間事業 運営委員＞

- 【委員長】 土肥 洋子（ハミングフォーラム習志野）
- 【副委員長】 松永 照義（ちば菜の花会 習志野支部）
- 【運営委員】 浅井 悦子（習志野市消費生活研究会）
- 植松 礼子（NPO 法人 ウィメンズ・ウィングちば）
- 榎本 和子（習志野市芸術文化協会）
- 国分 博子（習志野まちづくり研究会）
- 齊藤 真理（習志野まちづくり研究会）
- 佐藤 佐知子（クローバーならしの）
- 田島 裕子（新日本婦人の会 習志野支部）
- 山田 基子（習志野女性史聞き書きの会・史の会）
- 山西 愛子（習志野女性史聞き書きの会・史の会）

【事務局】 習志野市男女共同参画センター（ステップならしの）

【協力】 習志野市立中央図書館